

近代の産業と生活

明治時代には、西洋からの技術や文化の導入を背景に産業革命が進み、小学校からの学校制度も整えられて現在につながる社会の枠組みができた。人々の暮らしや文化も従来のものを引き継ぎながら、新しい要素を取り入れて変化していった。何が変化し、何がかわらなかったのだろうか。

1 近代産業の発展

通貨と銀行

明治初年に発行された太政官札などは、新貨条例
で本位貨幣と定めた金貨とは交換できない不換紙幣

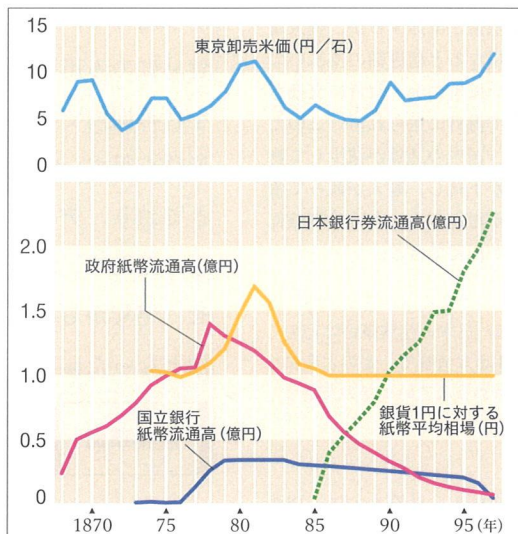
であった。政府は、1872(明治5)年に国立銀行条例を定めて、民営の国立銀行が金貨と交換できる兌換銀行券を発行することを許し、これに応じて第一国立銀行などが設立された。しかし、兌換銀行券を手にした人は金貨との引換えを求めがちで、兌換銀行券の流通は進まなかった。

1876(明治9)年、金禄公債証書の発行が決まると、政府は巨額の

公債が市場に出て価格が低下することを防ぐため、公債証書で出資してつくられた国立銀行が不換紙幣を発行することを認めた。これによって各地で盛んに国立銀行が新設され、1879(明治12)年に153行になったところで打ち切られたが、不換紙幣の国立銀行券が流通し、西南戦争の戦費をまかなうための政府紙幣の増発とあいまって貨幣流通量が増えた。このため激しいインフレーションが生じて、国内経済は活況を呈したが、消費物資の輸入額が増加して従来からの貿易赤字が拡大し、金・銀貨が流出した。金・銀貨が減少すると、輸入を必要とする軍備の近代化や産業への機械の導入が進まなくなる。また、インフレーションの進行は紙幣で定額の地租を受け取る政府の財政を困

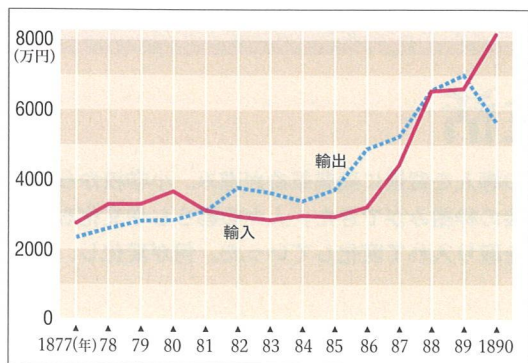
③ アメリカの制度にならったもので、「国立」とは国法にもとづいて設立されるという意味で、国有ではない。国立銀行条例では、発行する銀行券の正貨兌換を義務づけていた。

Q▶ 明治時代初期には、どのような貨幣が発行されたのだろうか。



紙幣整理の動向 国立銀行の営業期間は20年と定められており、国立銀行券は政府紙幣とともに回収されて、1899(明治32)年に通用停止となった。

(朝日新聞社編「日本経済統計総観」、後藤新一「日本の金融統計」より作成)



松方財政前後の輸出入 (朝日新聞社編『日本経済統計総観』より作成)



最初の日本銀行兌換銀券 (日本銀行金融研究所貨幣博物館蔵)

① 翌1883(明治16)年には国立銀行条例を改正して、銀行券発行権を国立銀行から取り上げ、国立銀行を普通銀行に転換させることにした。

Q> なぜ松方財政では、地租の実質的な増徴となったのだろうか。

② 紙幣を銀貨や金貨と兌換できるようにすると、通貨の国際的価値は安定する。国内では紙幣が流通するが、輸入超過になると超過額の支払いのため紙幣が金・銀貨に交換されて海外に送られる。このため、国内の通貨が減少して物価が下落し、輸入が減って輸出が増えるという自動調整作用が期待できる。

Q> 日本の産業革命はどのような分野で、どのように進められていったのだろうか。

③ 全国の会社資本金は、1885～90(明治18～23)年の5年間で、工業では777万円から7753万円に、運輸業では2559万円から1億363万円へと急速に増加した。

難にした。そこで1881(明治14)年に大蔵卿に就任した^{まつかたまさよし}松方正義は、官営事業の整理を含めて財政を緊縮し、^{そぜい}租税として回収した紙幣の一部を消却するデフレ政策をとり(松方財政)、一方で地域をこえた資金の融通をしやすくするため、1882(明治15)年に中央銀行として^{にっぽんぎん}日本銀行を設けた①。しかし、デフレーションは不況をもたらし、^{ちそ}地租の実質的な増徴となった。

輸入は銀貨の紙幣に対する価格が上昇して輸入品が割高となったため減少しはじめていたが、不況による消費の減退でさらに減少した。そして、税負担が増えた農民は低い価格でも生産物を売らざるをえなかった¹⁰ので、生糸や米の輸出が進み、貿易収支は黒字になった。当初、貿易にのみ用いることになっていた銀貨は1878(明治11)年から、納税を含め国内での流通が無制限に認められ、実質的に本位貨幣と同等の地位を得ていた。当時、世界的に金貨に対する銀貨の価格が低下してきており、デフレーションが進行すると、銀貨と紙幣の価格差がなくなったため、政府は1885(明治18)年に日本銀行に銀兌換紙幣を発行させ、翌年からは政府紙幣の銀兌換も始め、日本は実質的に銀本位制の国となった②。

産業革命

銀本位制の確立により物価が安定し、金利も低下したところから、株式取引も活発になり、産業界は活気づいた。1886～89(明治19～22)年には鉄道や紡績を中心^{ほうせき}に会社設立ブームがおこり(最初の^{ぼうこう}企業勃興)③、機械技術を本格的に用いる^{うしぎ}産業革命が日本でも始まった。ブームは株式への払込みが集中し、金融機関の資金が不足したところへ、前年の凶作と生糸輸出の半減^{きいと}が加わって挫^ぶ

※1 1897年、農工業を改良・発展させるため、
長期貸付を行う特殊銀行として設立。

※2 1902年産業資本への長期融資機関として
設立された特殊銀行

折^{せつ}した(1890年 恐慌^{きょうこう})。これを機に日本銀行は、普通銀行を通じて産業界に資金を供給する態勢を整えた。

日清戦争^{にっしん}の勝利で清から巨額^{ばいしやうきん}の賠償^{→p.259}金を得た政府は、これをもとに戦後経営に取り組み、軍備拡張を推進するとともに、金融・貿易の制度面の整備を進めた。1897(明治30)年に貨幣法^{かへいほう}を制定し、賠償金^{ばいしょうきん}の一部を準備金として、欧米諸国にならった金本位制^{きんぽんいせい}を採用し、貨幣価値の安定と貿易の振興をはかった^④。また、特定の分野に資金を供給する特殊銀行^⑤を設立した。

日清戦争後には鉄道や紡績などで再び企業勃興が生じた。その結果、繊維産業^{せんい}を中心として、資本主義^⑥が本格的に成立し、これにともなって、1900(明治33)年に、過剰生産^{かじょう}による恐慌がおこった。

貿易の規模は、産業革命の進展にともなって拡大したが、綿花^{めんか}などの原料品や機械・鉄などの重工業製品の輸入が増加したために、大幅な輸入超過^{ちやうか}となった。貿易品の取扱いでは、三井物産^{みつゐいぶっさん}会社に代表される商社^{しょうしや}が活躍し、特殊銀行である横浜正金銀行^{しやうきん}が積極的に貿易の金融に当たった。

紡績と製糸

日本の産業革命の中心は、綿糸^{めんし}を生産する紡績業であった。幕末以来、イギリス製綿製品の輸入に圧迫されて、綿花の栽培や綿糸・綿織物の生産は一時衰えた。しかし綿織物^{しやうしや}生産は、原料糸に輸入綿糸を用い、飛び杼^{とび}^⑦を取り入れて手織機^{ておりばた}を改良し、農村^{といやせいかない}の間屋制家内工業^{→p.212}を中心に、しだいに上向いた。このような綿織物業の回復が、原料糸を供給する紡績業の勃興の前提となった。1883(明治16)年には、渋沢栄一^{しぶざわえいいち}¹⁸¹⁰⁻¹⁹⁰¹らが設立した大阪紡績社^{おさかこうしん}が開業し、政府が進めた紡績所(2000鍾紡績)^{しりめ}の不振を尻目に、輸入の紡績機械・蒸気機関を用いた1万鍾の大規模経営に成功した。これに刺激されて、大阪などを中心に商人が会社を設立する動きが高まり、在来^{てつむぎ}の手紡^てやガラ紡^{ほう}^⑧による綿糸生産を圧迫しながら機械制生産が急増した。1890(明治23)年には、綿糸の生産量が輸入量を上まわり、日清戦争頃から中国・朝鮮への綿糸輸出が急増し、1897(明治30)年には輸出量が輸入量を上まわった。

日露戦争後には、大規模な紡績会社が合併などにより独占的な地位

④ 当時は金に対する銀の価値が低下し続けていたため、銀本位制をとっていることは、欧米の金本位制国への輸出を増やし、輸入を減らす効果をもった。しかし、金本位制国からの資本輸入の点では不利であった。銀の価値低下のため、新貨条例(→p.241)で1.5グラムであった1円金貨の金含有量は0.75グラムに変更された。

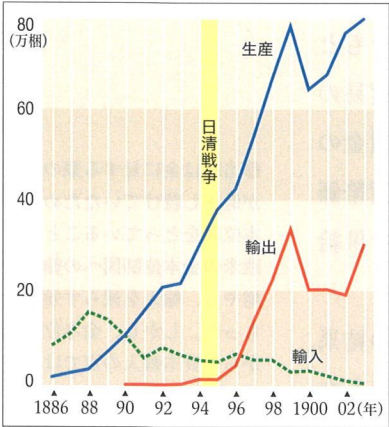
⑤ 日本勧業銀行^{かんぎやう}・日本興業銀行^{こうぎやう}・台湾銀行^{※1}・各府県の農工銀行などが設立された。^{※2}

⑥ 工場や機械・原材料などの生産手段を所有する資本家が、利潤獲得を目的に賃金労働者を雇用しておこなう経済活動が主流の経済体制をいう。

⑦ 綿糸をおさめた杼を、ひもで引くことで左右に動かす装置で、イギリスのジョン＝ケイが1733年に発明した。1873年のウィーン万国博覧会を機に日本に紹介され、普及していった。

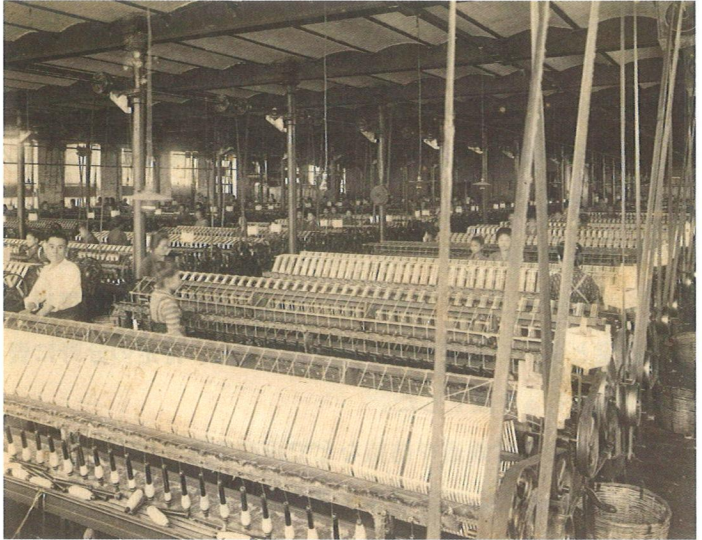
⑧ ガラ紡^{がらうんきむね}は臥雲辰致^{ふくぐんたけし}が発明し、第1回内国勸業博覧会で最高の賞を与えられた簡単な紡績機械である。人力式から水車式に改良されて以後、愛知県を中心に普及した。しかし、機械制大紡績工場の増加にともない、1890年代には衰退していった。

大阪紡績会社 イギリス製の最新式紡績機械を用い、電灯を設置して昼夜2交替制で操業し、大きな利益を上げた。(東洋紡株式会社蔵)



綿糸の生産と輸出入の変遷

(飯島幡司『日本紡績史』より作成)



を固め、輸入した大型力織機で綿織物もさかんに生産し、販売組合を結成して朝鮮・満洲市場への進出を強めた。一方、農村の綿織物業では、おもに手織機によって問屋制家内工業生産がおこなわれており、**豊田佐吉**らが考案した小型の**国産力織機**を導入して小工場に転換する動きが進んだ。1909(明治42)年には綿布輸出額が輸入額をこえた。

このように綿糸・綿織物の輸出は増加したが、原料綿花は中国・インド・アメリカなどからの輸入に依存したため、綿業貿易の輸入超過はむしろ増加した。それだけに国産の繭を原料とした生糸輸出で外貨を獲得できる製糸業の役割は重要であった。

幕末以来、生糸は最大の輸出品であり、製糸業は欧米向けの輸出産業として急速に発達した。当初は簡単な手動装置による**座繰製糸**が普及したが、ついで輸入機械に学んで在来技術を改良した**器械製糸**の小工場が長野県・山梨県などの農村地帯に続々と生まれ、原料の繭を供給する養蚕農家も増加した。輸出の増大にともない、**日清戦争後**には**器械製糸**の生産量が**座繰製糸**を上まわり、生糸を原料とする絹織物業でも、北陸地方を中心に輸出向けの羽二重生産が盛んになって、力織機も導入された。日露戦争後にはアメリカ向けを中心に生糸輸出がさらにのび、1909(明治42)年には中国を追いこして世界最大の生糸輸出国となった。

①器械製糸は、複数の作業者が用いる生糸の巻取り装置を1本の軸で連結し、人力や水車(のち蒸気機関)で回転させる点で、幕末に普及した座繰製糸と異なっていた。

鉄道と海運

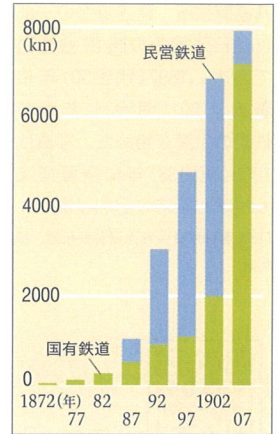
鉄道業では、華族を主体として1881(明治14)年に設立された**日本鉄道会社**が、政府の保護を受けて成功したことから、商人や地主らによる会社設立ブームがおこった。その結果、官営の東海道線(新橋・神戸間)が全通した1889(明治22)年には、
 5 営業キロ数で民営鉄道が官営を上まわった。**日本鉄道会社**が1891(明治24)年に上野・青森間を全通させたのをはじめ、山陽鉄道・九州鉄道などの民営鉄道も幹線の建設を進め、日清戦争後には青森・下関間が連絡された。しかし、日露戦争直後の1906(明治39)年、第1次西園寺公望内閣は、軍事的な政策もあって全国鉄道網の統一的管理を目指す**鉄道国有法**を公布し、主要幹線の民営鉄道17社を買収して国有化した。鉄道国有化で得た資金を重工業へ投じた資本家も多かった。

海運では、三菱の独占への反発から半官半民の共同運輸会社が設立され、両者は競争ののち、1885(明治18)年に合併して日本郵船会社となった。日本郵船は、政府の保護を受け、鉄道の発達に対応して近隣
 15 諸国との航路に重点を移し、1893(明治26年)には、綿花輸送を中心にインドのボンベイに航路を開いた。日清戦争後には海運業に対する助成が拡大され、日本郵船がヨーロッパ・アメリカ・オーストラリアへの航路を開くとともに、ほかの海運会社も遠洋航路に進出した。

重工業の形成

軍事工場と鉄道を除く官営事業は、1884(明治17)年頃からつぎつぎと民間に売却されていった(官営事業 払下げ)。とくに、三井・三菱(岩崎)・古河などの政商は優良鉱山の払下げを受け、巻上機の導入など機械化を進めて、石炭や銅の輸出を増やしていった。これらの政商はこうして鉱工業の基盤をもち、
 25 **財閥**に成長していった。また、北九州の筑豊一帯では排水用蒸気ポンプの導入に成功したのを契機に炭鉱開発が進み、筑豊炭田は日清戦争後に国内最大の産炭地となった。

しかし、重工業部門では、日清戦争後の造船奨励政策のもとで三菱長崎造船所などが成長したほかは民間での発達は限られ、材料となる



鉄道の発展(朝日新聞社編『日本経済統計総観』より作成)

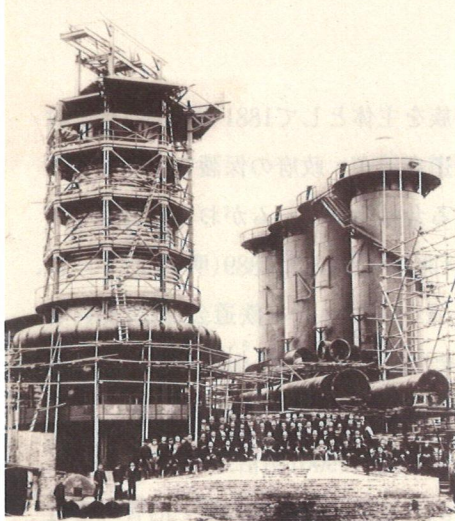
② 1896(明治29)年、政府は外貨節約と戦時の軍用船確保のため**造船奨励法・航海奨励法**を公布して、鉄鋼船の建造と外国航路への就航に奨励金を交付することにした。

事業所	年代	払下げ先	払下げ価格
高島炭鉱	1874	後藤象二郎、のち三菱が買収	円 550,000
院内銀山	1884	古河	108,977
阿仁銅山	1885	〃	337,766
三池炭鉱	1888	三井	4,590,439
佐渡金山	1896	三菱	2,560,926
生野銀山	1896	〃	(大阪製錬所とも)
長崎造船所	1887	三菱	459,000
兵庫造船所	1887	川崎	188,029
深川セメント製造所	1884	浅野	61,741
新町紡績所	1887	三井	141,000
富岡製糸場	1893	〃	121,460

主要な払下げ工場・鉱山(年代は払下げ許可年。小林正彬『日本の工業化と官業払下げ』より作成)

八幡製鉄所 建設資金の一部には日清戦争の賠償金も当てられ、1897(明治30)年に着工、1901(明治34)年から鉄鋼の生産を始めた。写真は、1900(明治33)年に伊藤博文が視察した時の記念写真。

(日本製鉄株式会社九州製鉄所蔵、福岡県)



鉄鋼も輸入に頼っていた。そこで軍備拡張を急ぐ政府は、官営軍事工場の拡充を進めるとともに、重工業の基礎となる鉄鋼の国産化を目指して、背後に筑豊炭田をひかえる北九州の八幡に、1897(明治30)年、官営製鉄所(八幡製鉄所)を設立した。八幡製鉄所は1901(明治34)年にドイツ

の技術を導入して操業を開始し、日露戦争の頃には生産を軌道に乗せたが、国内の需要を満たすことはできなかった。

① 中国の大製鉄会社漢冶萍公司に日本政府が借款を与えた見返りとして、八幡製鉄所は大冶鉄山(湖北省)の鉄鉱石を安価に入手した。

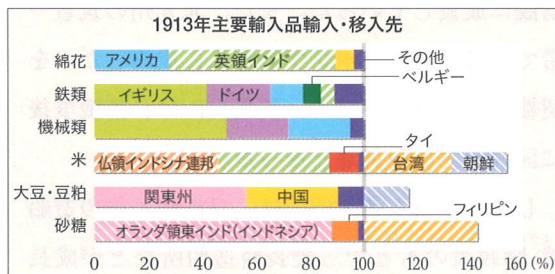
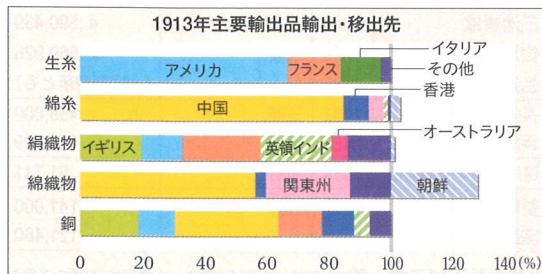
② まず1909(明治42)年、三井財閥が三井合名会社を、そののち1920年代初めにかけて、安田・三菱・住友の各財閥もそれぞれ持株会社を設立した。これら持株会社は、創業者の同族によって直接支配され、多数の財閥傘下企業の株式を所有していた。また、これら四大財閥のほかに、古河市兵衛・浅野総一郎・川崎正蔵らの中小財閥もあった。

日露戦争後、政府は外債募集を拡大するとともに各種の増税をおこなって、軍備拡張を中心とする戦後経営を進め、政府の保護のもとに民間重工業も発達しはじめた。鉄鋼業では、八幡製鉄所であいついで拡張計画が実施される。一方、日本製鋼所など民間の製鋼会社の設立が進んだ。政策的に重視されていた造船技術は世界水準に追いつき、機械をつくる工作機械の分野では、池貝鉄工所が先進国なみの精度をもった旋盤の国産化に成功した。また、水力発電の本格的な開始によって電力事業が勃興し、大都市では電灯の普及が始まった。

三井・三菱などの財閥は、金融・貿易・運輸・鉱山業などを中心に多角的経営を繰り広げ、株式所有を通じて様々な分野の多数の企業を支配するコンツェルン(企業連携)形態を整えはじめた。

また、日露戦争後には、満洲(関東州経由)とのあいだの綿織物輸出・大豆および豆粕輸入、朝鮮とのあいだの綿織物移出・米移入、

1913年の日本の貿易相手



(100%をこえる分は植民地とのあいだの移出・移入。大蔵省編「大日本外国貿易年表」、台湾総督府「台湾外国間及内地間貿易年表」より作成)



小作地率の変化(三和良一・原朗編『近現代日本経済史要覧 補訂版』より作成)

田植えの風景 1970年代に機械化が進むまで、田植えは伝統的な共同作業によってなされてきた。(横浜開港資料館蔵)

台湾からの米・砂糖^{さとう}の移入が増え、日本経済に占める植民地の役割が大きくなった。この時期には生糸・綿布などの輸出が増加したもの、原料綿花や軍需品・重工業資材の輸入が増加したため、貿易収支は、ほぼ毎年のように大幅な赤字となった。しかも、これに巨額の外債の利払い^{りばら}が加わり、日本の国際収支はしだいに危機的な状態におちいつていった。

農業と農民

工業に比べると農業の発展はにぶく、依然として米作を柱とする零細経営^{れいさい}が中心をなしていた。大豆粕

などの金肥の普及や品種改良^{しんしゅ}によって、単位面積当たりの収穫は増加したが、都市人口の増加により、米の供給は不足がちになった。

一方、貿易と国内工業の発達にともなって、農家も商品経済に深く巻き込まれ、自家用の衣料の生産は減少した。安価な輸入品におされて綿・麻・菜種^{な たね}などの生産は衰えたが、生糸輸出の増加に刺激されて桑の栽培や養蚕^{ようさん}が盛んになった。

1880年代の松方財政でのデフレ政策によって上昇しはじめていた小作地率は、1890年代にも上昇し続け、下層農民が小作へと転落する一方、大地主が耕作から離れて小作料の収入に依存する寄生地主^{きせい}となる動きが進んだ(寄生地主制)。小作料は現物納で、地租は定額金納であったため、米価の上昇は地主の収入増となり、地主は小作料収入をもとに企業をおこしたり、公債や株式に投資したりして、しだいに資本

③政府は1893(明治26)年に農事試験場を設けて、稲などの品種改良を進めた。

Q 鉱工業の発展や寄生地主制の進展により、どのような問題が生じたのだろうか。

主義との結びつきを深めた。一方、小作料の支払いに苦しむ小作農は、子女を工場に出稼ぎに出したり、副業を営んだりして、かろうじて家計をおぎなっていた。

日露戦争後になると、地租や間接税の負担増のもとで、農業生産の停滞や農村の困窮が社会問題となった。政府はこれに対応すべく地方改良運動を進め、協同事業に成功した村を模範村として、その事例を全国に紹介した。

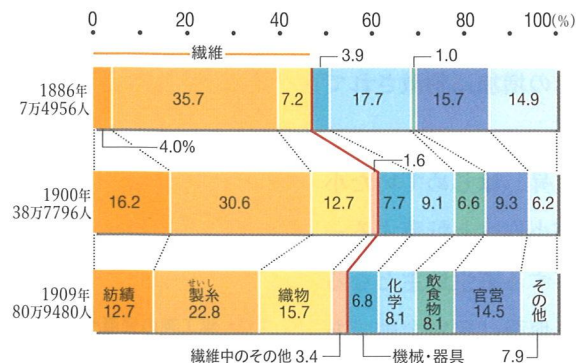
労働運動の進展

①1900(明治33)年には、工場労働者総数約39万人のうち、繊維産業が約24万人とほぼ6割を占め、その88%が女性であった。

工場制工業が勃興するにつれて、賃金労働者が増加した。当時の工場労働者の大半は繊維産業が占めており、その大部分は女性であった①。女性労働者(工女、または女工と呼ばれた)の多くは、苦しい家計を助けるために出稼ぎにきた小作農家などの子女たちで、賃金の前借りや寄宿舎制度で工場



塩尻峠をこえる工女 長野県の諏訪地方には製糸工場が集中し、各地から工女が集まった。多くは10代であった工女たちは、工場の寄宿舎で生活し、年末に賃金を受け取って帰省した。翌年の春にまた工場に戻ったが、その道のりは雪深い峠道を含む泊りがけの徒歩で、100kmをこえることも多かった。



工場労働者数の内訳 工場は10人以上使用のもの。

(大石嘉一郎編「日本産業革命の研究」より作成)



東京の「貧民窟」 1890年代に東京などの大都市には、日雇などで生計をかろうじて立てる貧しい人々が居住する「貧民窟」が各所に存在した。(『風俗画報』、国立国会図書館蔵)

足尾銅山 1897(明治30)年、政府は衆議院議員田中正造や被害住民の操業停止の要求を退け、鉱毒予防工事を命じた。住民の集団行動は弾圧され、1902(明治35)年の洪水で被害地に新たな土砂がかぶって被害が軽減されると洪水予防がおもな課題となり、被害地の谷中村では遊中地とするために全戸移転が命じられた。これに対して田中は谷中村に住んで抗議し続けた。

(国立国会図書館蔵)



に縛りつけられ、劣悪な労働環境のもと、欧米諸国よりはるかに低い賃金で長時間の労働に従事していた。紡績業では2交替制の昼夜業がおこなわれたり、製糸業では労働時間が約15時間、ときには18時間におよんだりすることもあった。重工業の男性熟練工の数はまだ限られており、工場以外では鉱山業や運輸業で多数の男性労働者が働いていた②。

日清戦争前後の産業革命期に入ると、待遇改善や賃金引上げを要求する工場労働者のストライキが始まり、1897(明治30)年には全国で40件余り発生した。同年にはアメリカの労働運動の影響を受けた高野房太郎・片山潜らが労働組合期成会を結成して労働運動の指導に乗り出すとともに、鉄工組合や日本鉄道矯正会などの労働組合が組織され、熟練工を中心に労働者が団結して資本家に対抗する動きが現れた。また1891(明治24)年には、足尾銅山(栃木県)の鉱毒が渡良瀬川流域の農漁業に深刻な被害をもたらした公害事件(足尾鉱毒事件)が発生し、15年余りにわたって大きな社会問題となった。

これらの動きに対して政府は、1900(明治33)年に治安警察法を制定し、労働者の団結権・ストライキ権を制限して労働運動を取り締まった。その反面で、政府は労働条件を改善して労資対立を緩和しようとする社会政策の立場③から、工場法の制定に向かった。日本で最初の労働者保護法である工場法は、資本家の反対もあって、1911(明治44)年によく制定されたが、きわめて不備な内容④であったうえに、その実施も1916(大正5)年にずれ込んだ。

三宅雪嶺の告発による

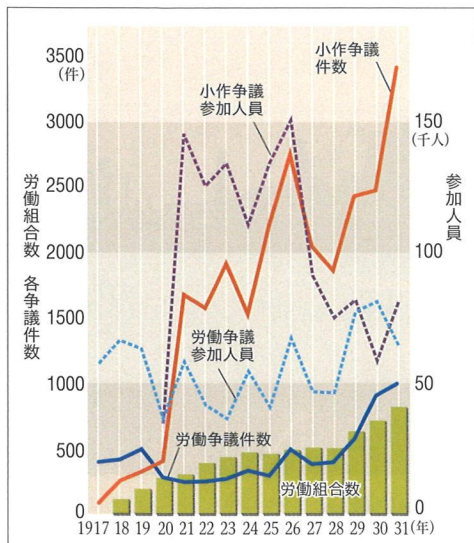
②産業革命期の労働者がおかれた悲惨な状態については、1888(明治21)年、雑誌『日本人』が高島炭鉱(長崎県、三菱経営)の労働者の惨状を報じて大きな反響を呼んだほか、横山源之助の『日本之下層社会』(1899年刊)や農商務省編『職工事情』(1903年刊)に記されている。

Q 労働運動では、どのようなことが要求されたのだろうか。

③その背景には、労働者家庭の生活状態の悪化は将来の国家の労働力や軍勢力をそこなう、という危機感が存在した。

④少年・女性の就業時間の限度を12時間とし、その深夜業を禁止した。適用範囲は15人以上を使用する工場に限られ、製糸業などに14時間労働、紡績業に期限つきで深夜業を認めていた。

職工業友会



労働争議・小作争議の推移

(日本統計研究所『日本経済統計集』より作成)

第一次世界大戦中には、産業の急速な発展によって労働者の数が大幅に増加し、物価高が進む中、賃金引上げを求める労働運動は大きく高揚し、労働争議の件数も急激に増加した。1912(大正元)年、労働者階級の地位向上と労働組合育成とを目的に鈴木文治^{ふん 1885 ~ 1946}によって組織された友愛会^{ゆうあいかい}は、この時期、修養団体から労働組合の全国組織へと急速に発展した。友愛会は、1919(大正8)年に大日本労働総同盟友愛会と改称するとともに、1920(大正9)年の第1回メーデー^{メイデー}を主催した。1921(大正10)年にはさらに日本労働総同盟^{ろうし}と改めて、労資協調主義からしだいに階級

闘争主義に方向を転換した。また、この前後から農村でも小作料^{こさくりよう}の引下げを求める小作争議が頻発し、1922(大正11)年には杉山元治郎^{すぎやまもと じろう 1885 ~ 1964}・賀川豊彦^{か がわとよひこ 1888 ~ 1960}らによって、全国組織である日本農民組合が結成された。

2 近代文化の発達

Q▶ 近代文化の発達の背景として、どのようなことがあげられるだろうか。

明治の文化と宗教

強大な欧米列強に対抗するために、新生の明治国家は、「富国強兵^{ふこくきやうへい}」「殖産興業^{しよくさんこうぎやう}」「文明開化^{ぶんめいかい}」といったスローガンを掲げ、西洋文明の移植による急速な近代化を推し進めた。しかし、物質文明の急激な流入に比べて多くの日本人の精神の変化はゆるやかで、都市に比べ農村の近代化は、はるかに遅れた。こうして明治の文化には、新しいものと古いもの、西洋的なものと東洋的なものが無秩序に混在・併存する、独特な二元性が存在することになった。

また、明治初期には新政府がみずから先頭に立って近代化を推進することが多かったが、明治の中頃からは教育の普及や交通・通信・出版の著しい発達^{いちじる}によって、国民の自覚が進み、国民自身の手による近代文化の発展をみるようになった。

宗教に関しては、政府は皇室とも結びつく神社神道を宗教ではないと位置づけて保護する一方、大日本帝国憲法で信教の自由を認めた。

明治初年の^{はいぶつ きしゃく}廃仏毀釈で打撃を受けた仏教は、キリスト教に対抗しよう^{→p.243}と海外も視察した^{しまじ もくらい}島地黙雷らの努力により近代の宗教として勢力を^{1838～1911}取り戻し、幕末に生まれた民衆宗教などの教派神道は人々のあいだに^{ぼくまつ}浸透していった。^{しんとう}
^{→p.230}

5 キリスト教は、明治初期に來日した^{Janes}クラークや^{1838～1909}ジェーンズらの外国人教師^{→p.241}の強い影響もあって、青年知識人のあいだで信仰が広がり、^{うちむらんざんどう えびな だんじょう に と べい なぞう}内村鑑三・海老名弾正・新渡戸稲造らはのちにキリスト教や西洋近代思想の啓蒙家として活躍するようになった。キリスト教会は布教のか^{けいもう か}たわら、人道主義の立場から教育・福祉活動や^{はいしやう}廃娼運動などに成果^{1856～1937}を上げたが、国家主義の風潮が高まると学校教育から排除されることもあった。^{1862～1933}

教育の普及

学制(1872年公布)のもとで、小学校教育の普及に努力が払われた結果、義務教育の就学率はしだいに高^{→p.242}まったが、地方の実情を無視した画一的な強制に対する政府内外の批判から、1879(明治12)年に学制は廃され、**教育令**が公布された。**教育令**では、全国画一の^{がく いっせい}学区制を廃して町村を小学校の設置単位とし、その管理も地方に移管し、就学義務を大幅に緩和した。

しかし、強制から放任への急転換は大きな混乱をまねいたため、教育令は翌年には早くも改正され、小学校教育に対する政府の監督責任が強調された。

これらの試行錯誤を経て、1886(明治19)年に^{ありのり}森有礼文部大臣のもとでいわゆる**学校令**が公布され、小学校・中学校・^{しはん}師範学校・帝国大学などからなる学校体系が整備された^{じんじやう}。尋常・高等小学校に関しては、1890(明治23)年に小学校令が改正され、尋常小学校3あるいは4年間の義務教育が明確化され、高等小学校の修業年限は2～4年とされた^⑧。さらに1907(明治40)年には**義務教育**は6年間に延長された。

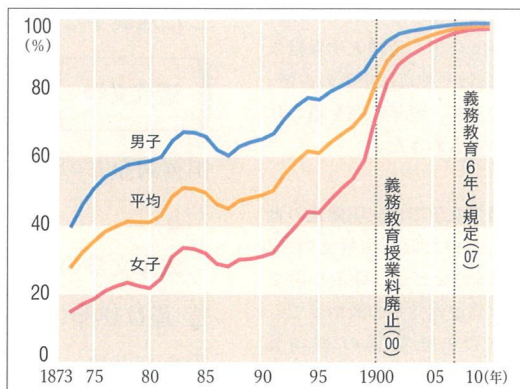
同時に、教育政策はしだいに国家主義重視の方向へと改められていき、1890(明治23)年に発布された^{ちよくご}**教育勅語**(「教育に関する勅語」)によって、**元田永孚・井上毅らが原案を起草した。**

① クラークは札幌農学校で、ジェーンズは熊本洋学校で教えた。

Q▶ 近代の学校教育は何を目標とし、どのように展開したのだろうか。

② 公布された帝国大学令・師範学校令・中学校令・小学校令などを総称して学校令という。小学校・中学校・師範学校は、それぞれ尋常・高等の2種にわけられたが、のち、尋常中学校が中学校、高等中学校が高等学校へと改称された。また、唯一の官立大学であった東京大学(→p.242)は、この時、帝国大学に改組された(1897年には東京帝国大学と改称)。

③ 1892(明治25)年の就学率は男子70%、女子36%であったが、1900(明治33)年に義務教育期間の授業料が廃止されたため、就学率は1902(明治35)年に90%をこえた。



義務教育における就学率の向上(文部省「学制百年史」より作成)

※1 明治10年代後半の朝鮮問題を機に唱えられ始めた。

独立国家として諸外国と対等の関係を保ち、さらに
国家の権利を拡張し、国力の充実を目指す思想。

① 1891(明治24)年、キリスト
教徒の内村鑑三は、講師をつ
とめる第一高等学校での教
育勅語奉読式の際、天皇の署
名のある教育勅語への拝礼を
拒否したために教壇を追われ
た(内村鑑三不敬事件)。

② 大正から昭和初期にかけて、
北海道・京城(朝鮮)・台北
(台湾)・大阪・名古屋の各帝
国大学が増設され、あわせて
「9帝大」となった。

- ・田中館愛橘は地磁気の測定、メ
ートル法やローマ字の普及、航
空物理学の発達などに寄与
- ・長岡半太郎は、原子構造の理論
を発表した。
- ・志賀潔は赤痢菌を発見した。
- ・鈴木梅太郎はオリザニンの抽出
に成功した。
- ・アメリカ人宣教師ヘボンが医療
に従事するとともに、新しいロ
ーマ字を考案し、聖書の和訳を
完成させた。

③ 科学的研究が伝統的な思想
と衝突することもあり、1891
(明治24)年、帝国大学教授久
米邦武が「神道は祭天の古俗」
と論じて、翌年に職を追われ
る事件もおきた。

④ 戯作文学では文明開化の世
相を描いた仮名垣魯文の『安
愚楽鍋』などが、政治小説で
は立憲改進黨系の政治家でも
あった矢野龍溪の『経国美
談』や東海散士の『佳人之奇
遇』などがある。

ちゅうくんあいこく

忠 君愛国が学校教育の基本であることが強調された①。1903(明治
36)年には小学校の教科書を文部省の著作に限ることが定められ(国定
教科書)、教育に対する国家の統制が強まった。

また、官立の高等教育機関の拡充が進み、東京帝国大学に加えて、
1897(明治30)年には京都帝国大学、ついで東北・九州の各帝国大学が
創設された②。民間では、慶応義塾・同志社に続いて、大隈重信が
創立した東京専門学校(のち早稲田大学と改称)などの私立学校が発達
し、官立学校とは異なった独自の学風を誇った。

科学の発達

国内で大学が発足すると、学問を導入するための留
学は、大学卒業者が中心となった。法学ではフラン
ス法律学からドイツ法律学・行政学へ中心が移り、さらに社会問題へ
の対応を含む社会政策学も導入された。大学の発足直後にはフェノロ
サ(経済学・哲学・美学)、モース(動物学・考古学)らアメリカ人教師
が幅広い学問分野の基礎を築き、その後は専門性の高い欧米人教師や
留学を経験した日本人たちが専門分野を確立していった。工学はダイ
アー(工部大学校)をはじめとしたイギリス人、医学はベルツらドイツ
人によるところが多く、それは日本人の留学先にも影響した。

きたさとしばぶろう

北里柴三郎がドイツ留学中の1890年に破傷風の血清療法を確立し、

たかみなむしやうさち

高峰譲吉がアメリカでタカジアスターゼを発明し、アドレナリンの
抽出に成功するなど、海外で評価される成果をあげ、さらにその成果
を国内に還元する科学者も現れた。国内でも長岡半太郎の原子構造の
研究のように物理学の高い水準での理解を示す研究や、地域性を生か
した地震学など自然科学の展開がみられた③。

近代文学

文学では、江戸時代以来の大衆文芸である戯作文学が、
明治初期も引き続き人気を博した。また、自由民権論・

国権論などの宣伝を目的に、政治運動家たちの手で政治小説が書かれ
た④。

かんぜんちやうあく

戯作文学の勧善懲悪主義や政治小説の政治至上主義に対し、坪内

しょうよう

逍遙は1885(明治18)年に評論『小説神髓』を発表して、西洋の文芸理
論をもとに、人間の内面や世相を客観的・写実的に描くことを提唱し
た(写実主義)。言文一致体で書かれた二葉亭四迷の『浮雲』は、逍遙の

提唱を文学作品として結実させたものでもあった。尾崎紅葉らの^{お ぎさこうよう}硯友^{けんゆう}
1867～1903

社^{しや}は、同じく写実主義を掲げながらも文芸小説の大衆化を進めた。
これに対して^{こうだろはん}幸田露伴^{こうだろはん}は逍遙の内面尊重を受け継ぎ、東洋哲学を基盤
1867～1917 「五重塔」
とする理想主義的な作品を著した。

5 日清戦争前後には、啓蒙主義や合理主義に反発して、感情・個性の
躍動を重んじるロマン主義文学が日本でも盛んになった。北村透谷ら
やくどう きたむらとうこく 1868～94
の雑誌『文学界』がその拠点となり、森鷗外・泉鏡花らの小説のほか、
のうがい いずみきょう か 1862～1922 1873～1939
詩歌の分野でも、島崎藤村の新体詩や与謝野晶子の情熱的な短歌が現
しいか しまざきとうぞん しんたいし よさのあきこ 1872～1913 1878～1912
れた。底辺の女性たちの悲哀を『たけくらべ』などの小説に描いた樋
ひ
10 口一葉も、ロマン主義の運動の影響下にあった。一方、正岡子規は俳
ぐちいちよう まさおかしき 1872～96
句の革新と万葉調和歌の復興を進め、伝統文芸の革新として注目さ
1867～1902
れた。

日清戦争後には、人道主義に立つ徳富蘆花(蘇峰の弟)の社会小説も
じんどう とくとみろか そほう 1868～1927
登場した。日露戦争の前後になると、フランス・ロシアの自然主義文
にちろ
15 学の影響によって、人間社会の暗い現実の姿をありのままに写し出そ
うとする自然主義が文壇の主流となり、国木田独歩・田山花袋・島崎
ぶんだん くいきだっほ たやまかたい しまざき 1871～1908 1871～1930
藤村・徳田秋声らの作家が現れた。ロマン主義から出発した詩人の
とうぞん とくだしゅうせい 1871～1913
石川啄木も、社会主義思想を盛り込んだ生活詩をうたい上げている。
たくはく 1886～1912

自然主義の隆盛に対立するかたちで、知識人の内面生活を国家・社
自然主義の隆盛に対立するかたちで、知識人の内面生活を国家・社
20 会との関係でとらえる^{なつめ そうせき}夏目漱石^{なつめ そうせき}の作品群や、森鷗外の一連の歴史小説
1867～1916 「吾輩は猫である」
なども現れた。また、文芸作品の批評が新聞・雑誌に掲載され、作家
ばかりでなく批評家も文壇で重要な地位を占めるようになった。

明治の芸術

演劇では、歌舞伎が民衆に親しまれた。明治の初め
かぶき 1816～93
には河竹黙阿弥が文明開化の風俗を取り入れた新作

25 を発表した。明治中期には名優たちが活躍する「^{だんきくさ}団菊左時代^{げん}」が現
しゅつ いちじる かわかみおとしろう 1864～1911
出し、その社会的地位も著しく向上した。^{オッペケペー節}川上音二郎^{オッペケペー節}らが時事的
な劇に民権思想を盛り込んだ^{そうししばい}壮士芝居^{しんばげき}は、日清戦争前後から人気があ
る通俗小説の劇化を加えて、新派劇と呼ばれた。さらに日露戦争後には、
坪内逍遙の^{おさなにかおる}文芸協会^{ぶんぎけい}や小山内薫の自由劇場などが、西洋の近代
1881～1928
30 劇を翻訳・上演し、歌舞伎や新派劇に対して新劇と呼ばれた。

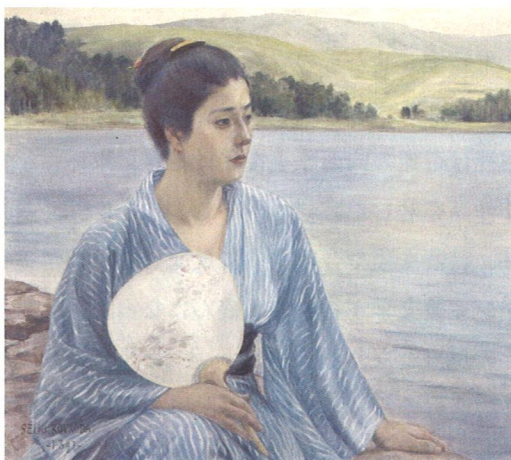
西洋音楽は軍楽隊で最初に取り入れられ、ついで^{いさわしゅうじ}伊沢修二^{いさわしゅうじ}らの努
ぐんがくたい 1851～1917

6 尾崎紅葉や山田美妙^{さやみよう}らを中心として結成され、回覧雑
志『我楽多文庫』を発刊した。

6 島崎藤村は『若葉集』によ
って新体詩を開き、与謝野晶
子は夫の与謝野鉄幹が主宰す
る、雑誌『明星』の誌上で活
躍した。『明星』はロマン主義
の運動の中心となった。

7 1897(明治30)年、病床に
あった子規の協力によって俳
句雑誌『ホトトギス』が創刊さ
れ、のちには門下の高浜虚子
に引き継がれた。また和歌で
は、子規の門下から伊藤左千
夫や長塚節らが出て、1908
(明治41)年には短歌雑誌『ア
ララギ』を創刊した。

8 1890年代には9代目市川団
十郎・5代目尾上菊五郎・
初代市川左團次が現れて、明
治歌舞伎の黄金時代をつくり
上げた。



「読書」(左)と「湖畔」(右)
黒田清輝は17歳でフランスに渡り、2年後に専攻を法律から絵画に改めて10年近く留学し、帰国後は東京美術学校に新設された西洋画科で指導に当たった。画面左下の署名は、フランスでの入選作である「読書」では和文、帰国後に日本らしい情景を描いた「湖畔」では欧文であり、日本を代表して欧米人と競って学び、その成果を日本で生かそうとした留学者の意気込みを感じさせる。(左:縦98.2cm、横78.7cm、右:縦69.0cm、横84.7cm、ともに東京国立博物館蔵)



「海の幸」 黒田清輝らの指導を受けた青木繁が、1904(明治37)年に白馬会展に出品した作品。房州(千葉県)布良の海でのモチーフで、大魚をかつぐ漁師の群が、リズムカルな構図、力強いデッサンと褐色の色調で描かれている。

(縦70.2cm、横182.0cm、石橋財団アーティゾン美術館蔵、東京都)

「老猿」 1893(明治26)年、シカゴ万国博覧会に出品して入賞した作品。

(高村光雲作、高さ90.9cm、東京国立博物館蔵)



「女」 作者の死後1910(明治43)年、第4回文展に出品され3等を受賞した作品。

(荻原守衛作、高さ98.5cm、東京国立近代美術館蔵)



力で小学校教育に西洋の歌謡を模倣した唱歌が採用された。1887(明治20)年に東京音楽学校が設立されて専門的な音楽教育が始まり、滝廉太郎らの作曲家が現れた。また、伝統的な能楽は明治中期から復活した。

学問や音楽と同じく、美術の発達も政府に依存する面が強かった。政府は、初め工部美術学校を開いて、外国人教師に西洋美術を教授させたが数年で閉鎖し、フェノロサや岡倉天心の影響のもとに、伝統美

とうぐうごしよ げいひんかんあかさかりきゆう
旧東宮御所(迎賓館赤坂離宮)

西洋の宮殿建築を国内で実現し、西洋建築導入の成果をみごとに示した。(東京都)

Q▶ 東宮御所は皇太子の住まいを意味するが、当時の皇太子が住むことはなかった。それはなぜか考えてみよう。



術育成の態度に転じて、1887(明治20)年に西洋美術を除外した**東京美**

術学校を設立した。このような政府の保護に支えられて、**狩野芳崖**・

橋本雅邦らがすぐれた日本画を創作した。政府が伝統美術の保護に傾

いた一因には、当時、ヨーロッパにおいて日本画が高い評価を受けて

いたこともあった。

西洋画は、高橋^{たか}橋^{はし}由^{ゆう}一^{いち}らによって開拓されたのち、一時衰退を余儀なくされたが、浅井^{あさ}忠^{あきら}らによる日本初の西洋美術団体である**明治美術**

会の結成や、フランスで学んだ黒田清輝^{くろだせいき}の帰国によって、しだいに盛んになった。1896(明治29)年には、東京美術学校に西洋画科が新設さ

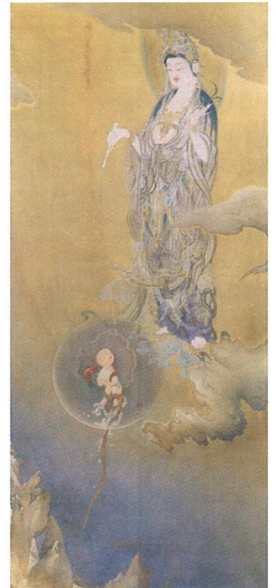
れる一方、黒田^{くろ}らは**白馬会**^{はくばかい}を創立して画壇の主流を形成した。

伝統美術も、岡倉天心^{おかくらてんしん}らの**日本美術院**を中心に、多くの美術団体が競合しながら発展していった。文部省も伝統美術と西洋美術の共栄をはかり、1907(明治40)年に**文部省美術展覧会**(文展)^{ぶんてん}❶が開設されたので、両者は共通の発表の場をもつに至った。

彫刻の分野でも、高村光雲^{たかむらこううん}の伝統的な木彫^{もくちょう}と、アメリカやフランスで学んだ荻原守衛^{おぎわらもりえ}らの西洋流の彫塑^{ちようそ}とが対立・競合しながら発達したが、絵画と同じく文展の開設によって共存の方向に向かった。工芸も西洋の技術を加味して、新しい陶器・七宝^{しっぽう}・ガラス・漆器^{しつき}などの制作を始め、陶器・七宝は海外にも輸出された。また建築でもしだいに本格的な西洋建築が建てられるようになり、明治末期になると、鉄筋コンクリートを使用した建物がつくられはじめた。

生活様式の近代化

明治になると生活のあり方も変化し、都市部を中心に官庁・会社・学校・軍隊では、ガラス窓のある建物で、机・椅子を使用し、洋服を着て、定められた時刻通りに行動する西洋風の生活習慣が取り入れられた。



「悲母観音」 狩野派の伝統技法に西洋画の技法を取り入れた作品。フェノロサや岡倉天心から期待された狩野芳崖の代表作。(縦195.8cm、横86.1cm、東京藝術大学蔵)

❶ 第1次西園寺内閣の文部大臣になった牧野伸顕(大久保利通の子)は、文部省や東京美術学校などの関係者の意見を入れて、日本画・洋画・彫刻の3部門よりなる総合展覧会の開設をはかり、第1回文展を開催した。文展はそのうちを重ね、1919(大正8)年に帝国美術院美術展覧会(帝展)に改組された。



山形市街図 1876(明治9)年に山形県令となった三島通庸(のちに福島県令)は、県庁・学校・警察署など洋風建築の官庁街をつくって文明開化の形で示した。
(高橋由一筆、山形県郷土館「文翔館」蔵)

大都市の中心部では、1870年代に石炭を原料とする都市ガスによるガス灯が用いられるようになった。1880年代末に電灯が実用化され、その後、
5
ガスのおもな用途は家庭の熱源となった。交通機関では、明治初期の鉄道開通に続いて、

1880年代には鉄道馬車が走り、1890年代になると京都で路面電車も開
通し、おもな都市で近代的な水道が使われるようになった。1900年前
10
後からは、路面電車が普及するとともに大都市の大手呉服店がアメリカのデパートメントストアにならって、ショーウィンドーや陳列台を用いて従来より幅広い顧客を対象とするデパート型の小売を開始した。人口10万人以上の都市の住民は、1890(明治23)年には総人口の
15
6%にすぎなかったが、1908(明治41)年には11%に増えた。

こうして人々の生活様式は、日本風と西洋風とが入りまじるようになった。女性の髪形として日本髪にかわって束髪が考案され、便利さから広くいきわたったのもその一例である。

地方の農漁村では石油を用いるランプが普及し、洋装の駐在巡査
20
や人力車がみられるようになった。輸入された糸や化学染料の利用で着物の選択の幅が広がり、資産家が郵便を利用した通信販売でデパートから商品を買うようにもなったが、日常生活に大きな変化はなく、
16
暦法も農漁業の関係から、太陽暦と並んで旧暦が用いられた。
→ p.243

3 市民生活の変容と大衆文化

大戦景気

日本経済は、明治末期から不況におちいていたが、
25
第一次世界大戦は戦場から遠く離れた日本に未曾有の好景気をもたらし、不況と政府の財政難とを一挙に吹き飛ばした。
日本は、英・仏・露などの連合国には軍需品や食料品などを、ヨーロッパ列強が後退したアジア市場には綿織物などを、また大戦ブームに

Q▶ 大戦景気の要因は何だろうか。

沸くアメリカには生糸^{きいと}などを輸出し、貿易は大幅な輸出超過^{ちようか}となった^①。

世界的な船舶不足^{せんぱく}を背景に、海運業・造船業は空前^{くうきよう}の好況^{こうきやう}となつて船成金^{ふななりきん}が続々と生まれ、日本はイギリス・アメリカにつぐ世界第3位の海運国となった。鉄鋼業では八幡製鉄所の拡張や民間会社

の設立があいつぎ、満洲^{まんしゅう}では満鉄の鞍山製鉄所^{あんざん}が設立された。また、ドイツからの輸入がとだえたため、薬品・染料・肥料などの国産化が目指され、化学工業^{ほくこう}が勃興した。大戦前から発達しはじめていた電力業では、大規模な水力発電事業が展開され、^{いなわしろ}猪苗代・東京間の長距離送電も完成し、電灯の農村部への普及や工業原動力^{じようきりよく}の蒸気力から電力への転換を推し進め、電気機械の国産化も進んだ。

その結果、重化学工業は工業生産額の30%を占めるようになった。輸出の拡大に刺激された繊維産業も活況を呈し、中国の上海^{シャンハイ}などで現地工場を経営する紡績業^{ほうせき}が続出した(^{ざいにか}在華紡)。

工業の躍進によって、工業(工場)生産額は農業生産額を追いこした。工場労働者数は大戦前の1.5倍に増えて150万人をこえ、なかでも男性労働者は重化学工業の発展により倍増して、女性労働者の数にせまった。それでも、工業人口は農業人口の半数以下にすぎなかった。

このような大戦景気の底は浅く、空前の好況が成金^{せいきん}を生み出す一方で、物価^{こうとう}の高騰^{こうとう}で苦しむ多数の民衆が存在した。また農業では、野菜の生産や牧畜業など商業的農業の発展がみられたが、農村人口の都市部への流出や農産物と工業製品との価格差の拡大などが顕著となった。

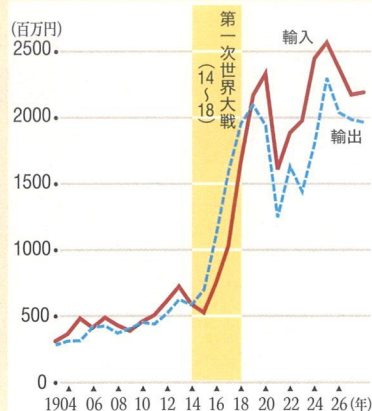
都市化の進展と市民生活

第一次世界大戦後、都市化と工業化の進展にともない、東京や大阪などの大都市では、会社員・銀行員・公務員などの^{ほうききゆう}俸給生活者(サラリーマン)が大量に現れた(新中間層)。また、タイピストや電話交換手などの仕事をもち女性も現れ、職業婦人と呼ばれた。

読みといてみよう

このグラフから、第一次世界大戦前後の日本の貿易は、どのような状況にあったといえるだろうか。また、その背景を説明してみよう。

第一次世界大戦前後の輸出入(朝日新聞社編『日本経済統計総観』より作成)



① 1914(大正3)年に11億円の債務国であった日本は、1920(大正9)年には27億円以上の債権国になった。

Q▶ 都市化の進展にともなう、市民生活はどのように変容したのだろうか。衣・食・住、さらには芸術文化の面など様々な分野で考えてみよう。

大正から昭和初期に現れたモガという言葉と職業婦人と呼ばれた当時の女性がたずさわった職業には、どのような共通する特徴があるだろうか。説明してみよう。



モガが行く アメリカのシネモード＝スタイルそのままのモガが、銀座通りを闊歩する姿。(影山光洋撮影)



和文タイプライターを打つ女性 1914(大正3)年に杉本京太が発明した。1916(大正5)年に販売されて以来、急速に普及し、タイピストの養成が急がれた。

都市の景観や市民生活も大きく変貌し、洋風化・近代化が進んだ。都心では丸の内ビルディング(丸ビル)など鉄筋コンクリート造のオフィスビルが出現し、都心部から郊外にのびる鉄道沿線には新中間層向けの文化住宅が建てられた。また、関東大震災の翌年の1924(大正13)年に設立された同潤会は、東京・横浜に木造住宅のほか4～5階建てのアパートを建設した。電灯は農村部も含めて広く一般家庭に普及し、都市では水道・ガスの供給事業が本格化した。都市内では市電やバス、円タクなどの交通機関が発達し、東京と大阪では地下鉄も開業した。服装では洋服を着る男性が増え、銀座や心斎橋などの盛り場では、断髪にスカート、山高帽にステッキといった装いのモガ(モダンガール)やモボ(モダンボーイ)が闊歩するようになり、食生活の面ではトンカツやカレーライスのような洋食が普及した。

阪神急行電鉄の本社事務所(梅田) 1920(大正9)年、この建物の1階を白木屋に貸して日用品を販売、日本ではじめてのターミナルデパートとなった。1925(大正14)年には本社事務所が移転し、白木屋に貸すのをやめてこの建物の2階と3階に直営の「阪急マーケット」を開業した。(阪急電鉄株式会社、大阪府)



また、様々な商品を陳列して販売する百貨店が発達した。日本の百貨店は、三越などの呉服店に起源をもつものが主流であったが、私鉄の経営するターミナルデパートが現れ、生鮮食料品など日用品の販売に重点をおいた。代表的なのは、1907(明治40)年設立の箕面有馬電気軌道(1918年に

阪神急行電鉄と改称)で、小林一三^{いっさう}のアイデアによって、乗客の増加をはかるため、沿線で住宅地開発を進めるとともに、遊園地や温泉、宝塚^{たからづか}少女歌劇団などの娯楽施設を経営し、ターミナルの梅田^{うめだ}ではデパートを開業した。

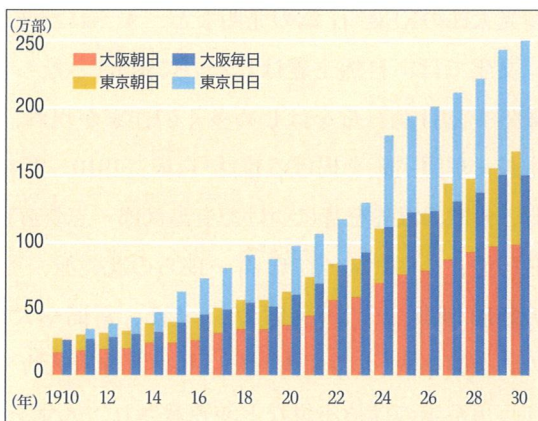
一方、大企業と中小企業、都市と農村とのあいだの格差が問題となり、二重構造と呼ばれた。個人消費支出が増加し、「大衆消費社会」の状況が現れたが、一般農家や中小企業の労働者の生活水準は低く、大企業で働く労働者とのあいだの格差が拡大した。

大衆文化の誕生

日露戦争後の1907(明治40)年には小学校^{しょうがく}の就学率^{しゅうがくりつ}が97%をこえ、ほとんどの国民が文字を読めるようになった。また、1920年代には中学校(旧制)の生徒数が急増し、高等教育機関も拡充された^①。そうした中で、新聞・雑誌・ラジオ・映画などのマスメディアが急速に発達し、労働者やサラリーマンなどの一般勤労者(大衆^{たいしゅう})を担い手とする大衆文化が誕生した。

新聞や雑誌の発行部数は、飛躍的にのびた。大正末期には、『大阪朝日新聞』と『東京朝日新聞』、『大阪毎日新聞』と『東京日日新聞』の系列のように発行部数100万部をこえる新聞が現れ、『中央公論』や『改造』などの総合雑誌も急速な発展をとげた。『サンデー毎日』や『週刊朝日』などの週刊誌、『主婦之友』などの女性雑誌のほか、一般投資家向けの『経済雑誌ダイヤモンド』なども刊行された。また、鈴木三重吉^{みえきち}は児童文芸雑誌『赤い鳥』を創刊した。昭和に入ると、『現代日本文学全集』などの『^{えんぱん}円本』や岩波文庫が登場して、低価格・大量出版の先駆けとなり、大衆娯楽雑誌『キン^{ごらく}グ』の発行部数も100万部をこえた。

ラジオや映画も発達した。ラジオ放送は、1925(大正14)年に東京・大阪・名古屋で開始され、翌年にはこれらの放送局

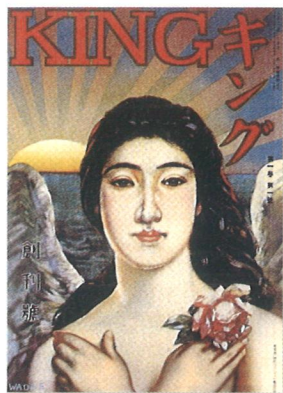


民衆解法による社会改造を進めるとの編集方針に立っていた

Q 就学率の向上、中等・高等教育の普及は国民の意識にどのような変化をもたらしたのだろうか。

① 中学校の生徒数は、1920(大正9)年には約17万人であったが、1930(昭和5)年には約34万人に倍増した。また、1918(大正7)年に原敬内閣によって制定された高等学校令にもとづいて、高等学校の増設が進められた。同年には大学令も制定され、総合大学である帝国大学のほかに、単科大学や公立・私立の大学の設置が認められた。大学生の数は、1918年には約9000人であったが、1930年には約7万人に増加した。

吉野作造が民本主義を発表



『キング』創刊号の表紙

1925(大正14)年に大日本雄弁会講談社が、「日本一面白くて為になる」雑誌をめざして創刊(1925年新年号)した。(日本近代文学館蔵)

新聞の発行部数(『朝日新聞社』『毎日新聞販売史』より作成)

❶ 1915(大正4)年に始まった全国中等学校優勝野球大会(現在の全国高校野球選手権大会)、1925(大正14)年に発足した東京六大学野球などが人気を集めた。

❷ 契約者の数は、開局の年には36万人であったが、満洲事変が始まると、出征兵士の安否を気づかう人々がラジオ放送の定時ニュースに耳を傾けるようになり、100万人をこえた。

Q> 大正デモクラシーの風潮の中で、学問・文学はどのような内容をとまっていたのだろうか。

❸ 『東洋経済新報』の記者であった石橋湛山は、朝鮮や満洲など植民地の放棄と平和的な経済発展を主張した。石橋のこのような考え方は「小日本主義」と呼ばれた。

❹ この論争は日本資本主義論争と呼ばれ、その後の日本の社会科学の方法に大きな影響をおよぼした。雑誌『労農』に論文を執筆した柳田民蔵・猪俣津南雄らの労農派と、野呂栄太郎が編集した『日本資本主義発達史講座』に論文を執筆した羽仁五郎・服部之総・山田盛太郎らの講座派とのあいだで論争がおこなわれた。

❺ 欧米諸国に対抗しうる物理学や化学の研究をおこなうことを目的に、財界からの寄付金、国庫補助、皇室下賜金によって設立され、のちに理研コンツェルンに成長した。

を統合して日本放送協会(NHK)が設立された。ラジオ劇やスポーツの実況放送などが人気を呼び、放送網が全国に拡大した。映画は活動写真と呼ばれ、当初は無声映画を弁士の解説つきで上映していたが、大正期には大衆娯楽として発展し、日活や松竹などの映画会社が国産映画の制作に乗り出した。なお、1930年代に入ると、トーキーと呼ばれた有声映画の制作や上映が始まった。

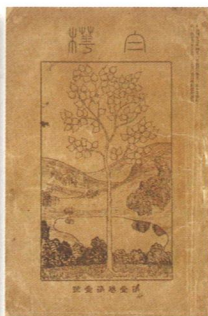
学問と芸術

大正デモクラシーの風潮のもとで、多様な学問や芸術が発達した。欧米諸国の様々な思想や文学が紹介され、『東洋経済新報』などで急進的自由主義が主張される一方、マルクス主義が知識人に大きな影響を与えた。なかでも、1917(大正6)年に出版された河上肇の『貧乏物語』は広範な読者を獲得した。マルクス主義は、学問研究の方法にも影響をおよぼし、昭和初期には、明治維新以来の日本社会の性格をどのように把握するかをめぐる論争が展開された。

また、西田幾多郎は『善の研究』を著して独自の哲学体系を打ち立て、和辻哲郎は仏教美術や日本思想史を研究し、『古寺巡礼』『風土』などを著した。津田左右吉は『古事記』『日本書紀』に科学的分析を加え、柳田国男は民間伝承の調査・研究を通じて、無名の民衆(「常民」)の生活史を明らかにする民俗学を確立した。

自然科学の分野では、第一次世界大戦期に染料・薬品などの輸入がとだえたため、この分野での独自の研究が始まり、1917(大正6)年には理化学研究所が設立された。また、野口英世の黄熱病の研究、多光太郎のKS磁石鋼の発明など、すぐれた業績が生まれた。

文学では、自然主義はしだいに退潮となったが、明治後期から森鷗外や夏目漱石をはじめ多くの作家が現れ、活況を呈した。人道主義・理想主義を掲げる雑誌『白樺』(1910~23年)を中心に、都会的感覚と西欧的教養を身につけた有島武郎・志賀直哉・武者小路実篤らの白樺派、永井荷風・谷崎潤一郎らの耽美派、芥川龍之介・菊池寛らの新思潮派などが活躍した。また、新聞や大衆雑誌には、中里介山の大長編小説『大菩薩峠』をはじめ、吉川英治・大佛次郎の時代小説、江戸川乱歩の探偵小説などが連載され、人気を博した(大衆文学)。さ



「金蓉」(安井曾太郎筆、縦96.5cm、横74.5cm、東京国立近代美術館蔵)

『太陽のない街』と『白樺』創刊号の表紙 『太陽のない街』は、1926(昭和元)年の共同印刷争議における徳永直みずからの体験を素材とした小説。『白樺』は、1910(明治43)年4月に創刊され、反自然主義の立場で人道主義・理想主義・個性の尊重などをとてなえた。(日本近代文学館蔵)

らに、社会主義運動・労働運動の高揚にともなってプロレタリア文学運動がおり、1921(大正10)年に反戦平和・被抑圧階級の解放などを掲げた文芸誌『種蒔く人』、1928(昭和3)年に全日本無産者芸術連盟(ナップ)の機関誌『戦旗』などが創刊され、小林多喜二、徳永直らが作品を寄せた。

「蟹工船」

「太陽のない街」

演劇では、1924(大正13)年に小山内薫・土方与志らが創設した築地小劇場が新劇運動の中心となり、知識人のあいだに大きな反響を呼んだ。音楽では洋楽の普及がめざましく、小学校の唱歌とともに、新たに民間で創作された童謡がさかんにうたわれるようになった。山田耕筰は、本格的な交響曲の作曲や演奏に活躍した。

美術の世界では、文展のアカデミズムに対抗する洋画の在野勢力として二科会や春陽会が創立され、安井曾太郎・梅原龍三郎・岸田劉生らが活躍した。日本画では、横山大観らが日本美術院を再興して院展を盛んにし、近代絵画としての新しい様式を開拓した。建築では、

1914(大正3)年に開業した東京駅が辰野金吾の代表的な作品となった。



「転生」高村光雲に学び、岡倉天心に認められて日本を代表する彫刻家となった平櫓田中の代表作の1つ。

(高さ239.3cm、東京藝術大学蔵)

第14章のまとめ

- 問1 日本の産業革命の要因として、何があげられるだろうか。政府の政策や社会状況など、様々な観点から考えてみよう。
- 問2 日本における大衆文化の発展の背景には、何があるだろうか。政府の政策や社会状況など、様々な観点から考えてみよう。
- 問3 産業革命や大衆化が進む中で生じてきた問題には、どのようなものがあるだろうか。また、現代社会における問題と比較してみよう。